

昨日のこのように鮮明に、話せば涙があふれ、身近な人たちを抱きしめたくなる。東日本大震災は、今なお私たちの複雑な感情をあまり続けています。

「せんだい防災プロジェクト」は、二〇一三年六月に実施された「女性の視点による地域防災ワークショップ」の参加者である私たち市民と、公益財団法人せんだい男女共同参画財団の職員とで結成されました。

私たちは女性や障がいのある方、お年寄りなど、さまざまな事情をもつ人たちの「暮らし視点」で、避難所運営を疑似体験する防災ワークシ

東北復興日記

97



せんだい防災プロジェクトチーム
眞野美加さん

避難所運営を疑似体験

ヨッププログラムを作り
ました。プロジェクトメ
ンバーは十一人、三カ月
かかりました。使用する
事例は、仮設住宅に伺っ
てお聞きした、実際に起
こった内容を盛り込んで
います。これまでに仙台

を中心に出前講座を十一
回開催し、子供から大人
まで約二百四十人に参加
いただきました。
例えば、避難所で「赤
ちゃんがるるさくて眠れ
ない」と訴える男性がい
るといふケースには、お



子さんを持つ女性参加者
から「赤ちゃんにもお母
さんにも相当ストレスが
かかっているに違いな
い。母子でゆったりでき
るスペースをつくると
か、ハンドマッサージな
どしてリラククスできる
場所があったら良いので
は？」という具合です。

五月の第七回車座Ⅱ写
真Ⅱでは首都圏の参加者
から「避難所の運営に自
分たち市民が主体的に関
わることを初めて知りま
した」という感想も。

避難所運営はもとよ
り、平時の日々の暮らし
でも多様な人が地域づく

りに関わり、話し合い、
活動を継続していくこと
こそが多様性に配慮した
まちづくりにつながると
思います。

「防災は東北に学べ」
という言葉は、言い換え
れば「悲しみ、苦しみも
今の東北で食い止める」
という、私たちの経験を
無駄にしない誓いと重な
ります。

東北の復興と未来の被災地への防災に、私たち
なりの活動が役立てばと
思っています。

この連載は、東京の
NPO法人JKSK
と、被災地の女性たち
が協力して復興に取り
組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲
載しています。